



カルナバイオサイエンス株式会社

株主通信 第8期報告書

2010年1月1日～2010年12月31日

CONTENTS

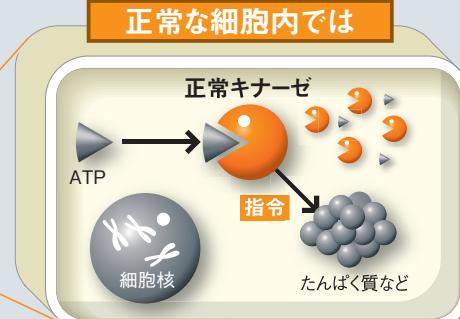
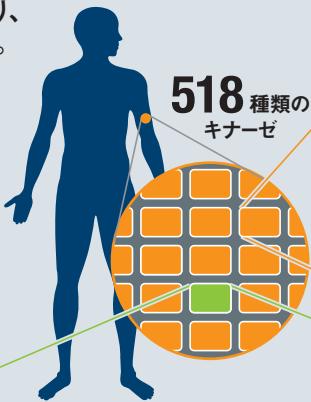
キナーゼとキナーゼ阻害薬の特徴とその研究	P1
当社のビジネスモデル	P3
財務ハイライト	P5
株主の皆様へ(トップメッセージ)	P6
特集	P11
トピックス	P12
連結財務諸表	P13
株式の状況/株主メモ	P14
会社概要	裏表紙

「キナーゼ」の豊富な知見と、 高い研究開発力で、創薬研究をリードします。

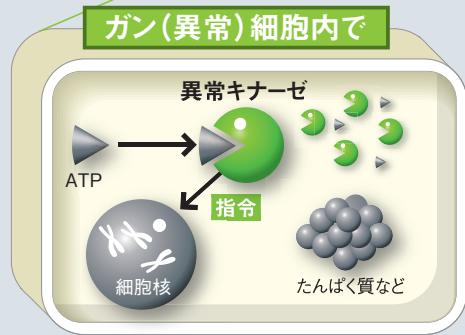
「キナーゼ」と「キナーゼ阻害薬」とは？

人体は膨大な数の細胞でできており、その1つ1つにキナーゼが存在する。

「キナーゼ(プロテインキナーゼ)」とは、生体の細胞内において重要な「指令」の伝達を担っている酵素で、細胞の増殖・分裂・死などを制御しています。この指令に混乱が生じると細胞の異常増殖や分化が起こり、ガンを始めとする様々な疾患を引き起こします。「キナーゼ阻害薬」は、異常キナーゼの活動を止める医薬品です。

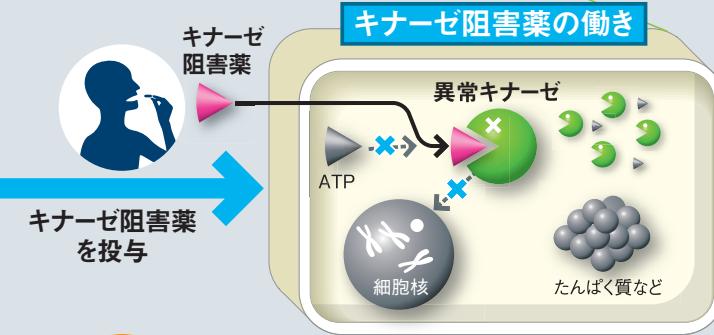


キナーゼはATPという物質と結合し、他の分子に「**生命活動に必要な指令**」を出す。



ガン細胞中の異常キナーゼはATPと結合し、細胞核に「**ガン細胞を増やす指令**」を出す。

ガン細胞が
増殖



阻害薬がキナーゼに結合し、指令を止める。

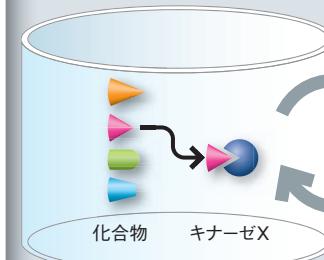
ガン細胞の
増殖ストップ

キナーゼ阻害薬の研究・開発プロセス

プロセス1
新薬候補となる化合物を選び出す

ガンなどの病気にかかわるキナーゼの働きを抑える化合物を見つけるため、数千~数十万の化合物ライブラリーから、対象のキナーゼを阻害する効果の大きい候補化合物を選択します(大規模スクリーニング)。また、対象のキナーゼを阻害する効果を測定するためには、対象とするキナーゼのアッセイ法の開発が必要となります。

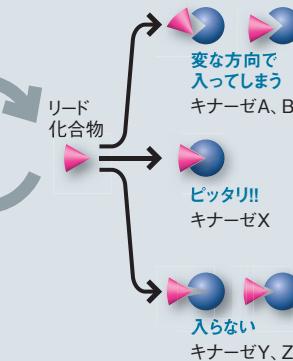
スクリーニング



プロセス2
候補化合物を更に絞り込む

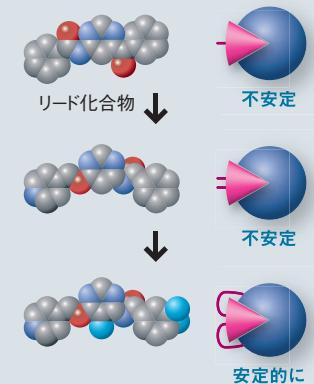
新薬候補として選ばれた化合物について、それらが対象のキナーゼ以外を阻害しないことを確認します(プロファイリング)。プロセス1、2のステップを繰り返すことにより、更にふるいにかけ、数種類の「リード化合物」に絞込みます。

プロファイリング



プロセス3
新薬として最適な化合物を創り出す

①「リード化合物」がどの程度の効果をもつかを調べる→②コンピュータを用いてより効果の高い化合物の分子構造を設計する(CADD)→③設計に基づいて改良した化合物の効果を検証する—この①~③のサイクルを繰り返すことで、新薬として最適な化合物を創り出していきます。



プロセス4
実験動物を用いて評価を行う(前臨床試験)

新薬候補化合物を実験動物に投与して、薬効と安全性を評価します。前臨床試験は、大きく薬理試験、薬物動態試験、毒性試験の3種類に分類されます。これらの試験の結果により、新薬候補化合物が臨床試験に入れるか否かが判断されます。

プロセス5
臨床試験・審査から販売へ

前臨床試験で薬効と安全性が認められた新薬候補化合物は、臨床試験で実際にヒトに投与され、主作用と副作用が検討されます。これらの結果も含め、申請資料を作成し、厚生労働省の審査を受けます。厚生労働省の承認を受けてはじめて、お薬として販売することができます。

創薬の自社研究と、他社のサポート。 高度な技術で創薬の未来を拓きます。

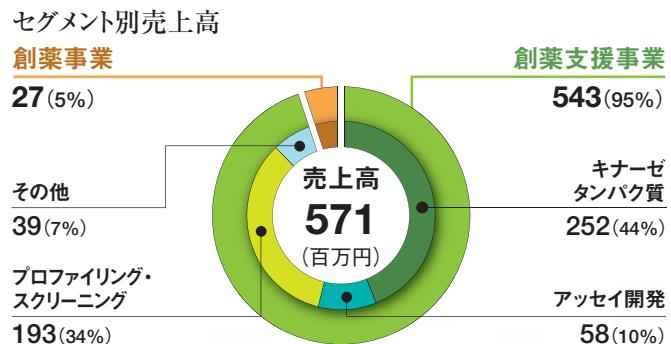
キナーゼ阻害薬の創製に取り組む国内外の様々な顧客をサポートする「創薬支援事業」。
培った高度な創薬基盤技術を駆使し、自ら画期的な新薬の創製をめざす「創薬事業」。
カルナバイオサイエンスは、2つの事業で医療の未解決課題に挑戦しています。

当社の事業

当社では、キナーゼ阻害薬の創薬研究に欠かせない高品質の「キナーゼタンパク質」を多数(世界トップの339種類、平成22年12月31日現在)製品化し、製薬会社を始めとする国内外の顧客に供給しています。また、顧客の創薬開発において、新薬候補成分(化合物)の分析・評価プロセスを簡便化する「アッセイキット」の開発や、新薬の候補となる化合物と各キナーゼの相互作用を網羅的に調べる「プロファイリング・サービス」、特定キナーゼに作用する化合物を選び出す「スクリーニング・サービス」など、幅広い技術・サービスで顧客の創薬研究を支援しています。

当社はこうした自社で培った高度な創薬基盤技術を活用して、他社へのサポートビジネスを行っています。自社においても画期的なキナーゼ阻害薬の研究開発に取り組んでいます。大手製薬企業出身者で構成された優秀なスタッフ陣による研究能力は、国内外の企業や大学からも高く評価されており、様々な共同研究プロジェクトも進んでいます。新たに薬理

評価機能を強化した創薬研究部を設置し、開発のステージアップの更なる加速を図るとともに、がんを重点領域として創薬プログラムを再編し、製薬企業に画期的な新薬を早期に導出することを目標として取り組んでいます。



創薬支援事業

キナーゼタンパク質製造販売
世界トップレベルの高品質タンパク質を製品化。μgレベルからmgレベルまでの幅広い供給体制を整備。



アッセイキット開発販売
キナーゼタンパク質とそれに適合した基質※、希釈液、プロトコル(手順書)等をセットにした「アッセイキット」は創薬研究の効率化に貢献。



プロファイリング・スクリーニングの受託
特定の化合物の多種のキナーゼへの作用を測定する「プロファイリング」、目的的作用を持つ化合物を探し出す「スクリーニング」も受託。



創薬事業

創薬研究
最先端のキナーゼ創薬に関するノウハウを基に、自社だけでなく製薬企業やアカデミアと共に分子標的薬の研究開発を実施。



※ 基質：キナーゼによってリン酸化作用を受けるタンパク質やペプチド

各事業のビジネスモデル

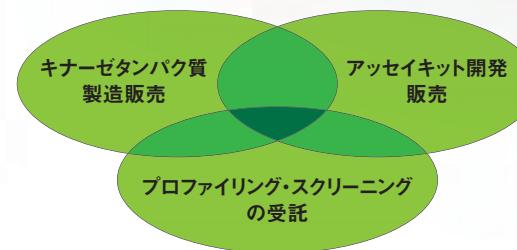
創薬支援事業

新薬に最適な化合物を選び出すには、高品質のキナーゼタンパク質と、アッセイ系、プロファイリング、スクリーニングといった基盤技術が不可欠。当社はこれらの製品・サービス群で世界トップレベルの「品揃え」を実現しています。現在、国内製薬企業の多くから製品・サービスを受注しており、更に国内の10倍の市場規模がある海外でも着実に顧客層を拡大中です。

創薬事業

創薬のプロセスには多くの段階(フェーズ)がありますが、当社が手がけるのはコスト負担の少ない「フェーズIIa」までの段階。そこで開発した新薬候補化合物を製薬企業に導出することで「契約一時金」、各研究・開発段階での「マイルストーン収入」、新薬上市後の「ロイヤリティ収入」を得ていく収益モデルを展開しています。

創薬研究に役立つ製品・サービスを提供

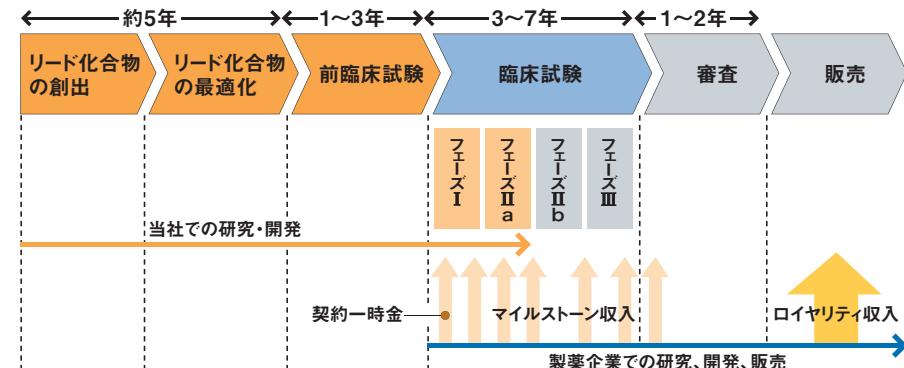


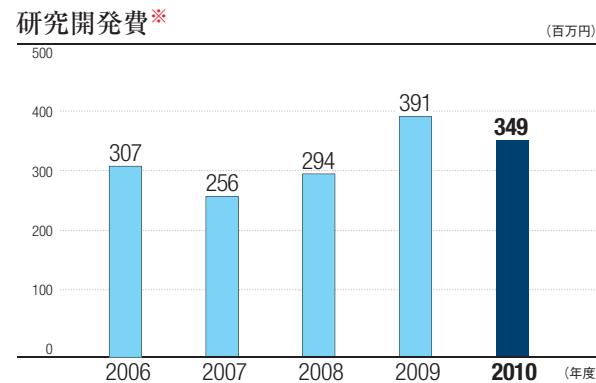
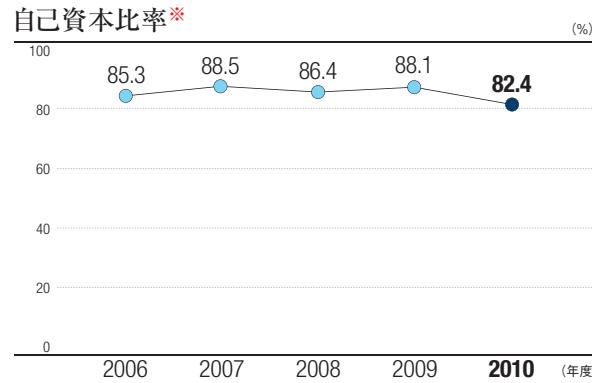
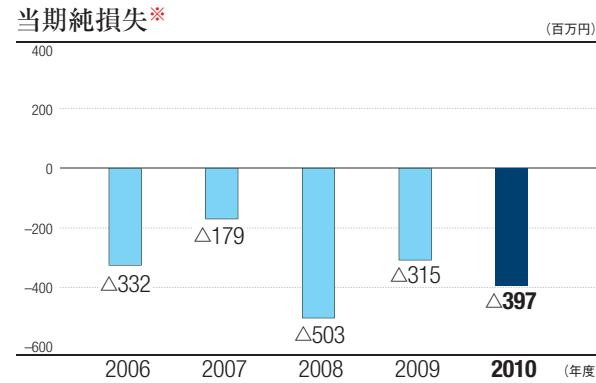
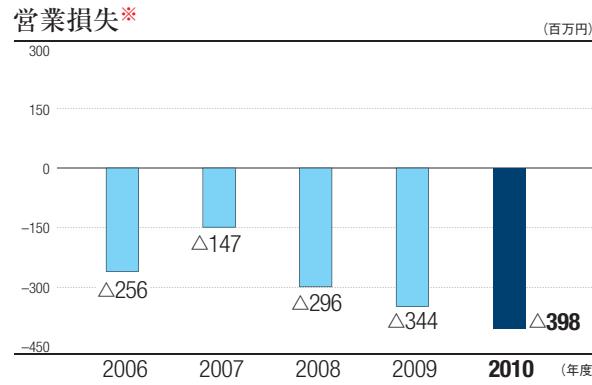
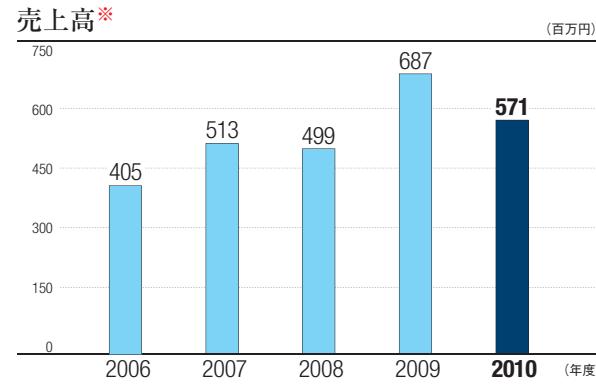
キナーゼ阻害薬の研究・開発プロセス
(詳細はP2参照)

1. 新薬候補となる化合物を選び出す
2. 候補化合物を更に絞り込む
3. 新薬として最適な化合物を創り出す
4. 実験動物を用いて評価を行う(前臨床試験)
5. 臨床試験・審査から販売へ

企業・大学・研究所でのキナーゼ阻害薬開発をサポート。プロセス1~3で当社の商品が活躍しています。

創薬における当社と製薬企業との関係





※ 2007年度までは非連結、2008年度より連結決算

厳しい結果に終わった当期を新たな起点として 次期からの「大いなる飛躍」をめざします。

Q 当期(2010年12月期)の総括は?

A 厳しい市場環境のなかで、再成長への布石を打つことができました。

医薬品業界では、1990年代後半に発売された各社の主力商品が2010年前後に相次いで特許切れとなること(製薬業界の「2010年

問題])や、各国政府の進める後発医薬品の促進政策、医療費の抑制政策などに備えて国内外の大手製薬企業がコスト削減に動いています。こうした状況が当社業績にも大きな影響を及ぼし、当期の連結売上高は571百万円(前年比16.8%減)、経常損失は370百万円(前期は349百万円の損失)、当期純損失は397百万円(前期は315百万円の損失)となりました。国内の売上高は期初計画をほぼ達成できましたが、欧米での販売が予想以上に伸びず、これまでずっと高めてきた創薬支援事業における海外売上比率も、当期は41.5%と前年(46.4%)から低下しました。

海外で苦戦した理由の一つは、大規模な製薬業界再編の影響です。厳しい事業環境に対応するため、欧米では大手・中堅製薬企業の合併が進んでおり、各社の研究部門の整理統合による研究所閉鎖や、研究の一時的停止が、売上減につながりました。各社の予算管理も厳しくなっており、例年見込めた期末の駆け込み需要も



代表取締役社長
吉野 公一郎

セグメント別売上高 (百万円)

事業	2009年度		2010年度	
	第2四半期	期末	第2四半期	期末
創薬支援事業	298	560	309	543
キナーゼタンパク質	154	312	135	252
アッセイ開発	54	67	26	58
プロファイリング・スクリーニング	87	148	123	193
その他	1	32	24	39
創薬事業	20	126	13	27



激減しました。これらに加え、当期後半に急速に進展した円高(ドル安・ユーロ安)の影響もありました。

このように大変厳しい1年ではありましたが、一方で、海外での新規顧客数の増加、国内の既存顧客への深耕、創薬部門での体制強化と

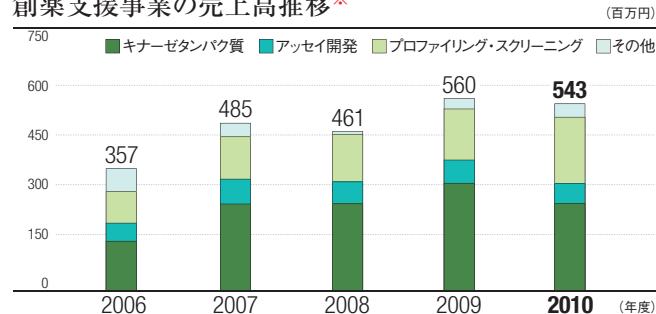
研究のレベルアップなどにおいては、着実に成果を積み重ねました。次期にはそうした布石を業績につなげ、経営を再び成長路線に乗せることができると確信しております。

Q 創薬支援事業の主な取り組みと成果は?

A キナーゼ製品の品揃え拡充と、国内外での営業強化に注力しました。

当期の創薬支援事業の売上高は、543百万円(前年比3.0%減)でした。国内売上は317百万円(前年比5.8%増)と健闘しましたが、海外売上高が225百万円(同13.2%減)と低下したことが響きました。ただし顧客数の面では、欧州で42社、米国で74社、アジアを含むその他でも11社と、海外の新規顧客を着実に増やしています。

創薬支援事業の売上高推移※



※ 2007年度までは非連結、2008年度より連結決算

また、国内の既存顧客へきめ細かなサービスの提供に努めたことで、プロファイリング・スクリーニングサービスについては前年より売上を29.9%伸ばすことができました。

当期はキナーゼ製品の品揃え強化にも努めました。これはキナーゼの種類数を増やすのではなく、「ピオチン化キナーゼ(固定して使用するタイプ)」など、顧客からの要望に応えるかたちで製品ラインアップに加え、顧客満足度の向上を目指したものです。新商品への市場反応は非常に良く、積極的な宣伝活動の効果もあって新規顧客からの受注も増加しています。

一方で、当期は営業力の強化にも取り組みました。米国において新たに営業担当者を採用したほか、欧州市場向けの営業体制も強化しました。新任担当者の専門性を高めるためにはある程度の時間を要しますが、次期には必ずこれらの強化策の成果が業績に反映されてくるものと見ています。

Q 創薬支援事業の今後は?

A 重点顧客を明確化し、伸びしろの大きい海外で販売拡大を図ります。

国内の主要製薬企業は既に当社顧客であるため、国内では

創薬事業の売上高推移※



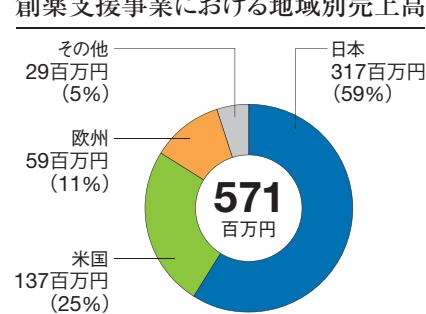
顧客数は大きく増やせませんが、情報提供力・提案力をさらに高めることで、1顧客あたりの販売量拡大に努めていきます。

一方、海外に関しては未開拓の製薬企業や研究所がまだ数多くあり、引き続き新規開拓に努めていきます。特にキナーゼ研究の盛んな北米市場での伸びしろは非常に大きく、商品力・販売力の強化に取り組むことで、今後大きく拡大できると期待しています。

今後は欧米市場でも、国内同様にターゲットとなる重点顧客を明確にし、顧客の特性や重要度に応じた個別対応を強化します。現在の大手製薬会社は、自社での研究開発から有力バイオベンチャーとの提携・買収へと戦略をシフトしているため、そうした有力バイオベンチャーもターゲットとして視野に入れています。また米国では大学などのアカデミアも有望市場です。国策としてケミカルバイオロジー(化学生物学)※に力を入れている米国では、各大学でキナーゼ研究が盛んに行われており、キナーゼタンパク質やハイスループットスクリーニングの大口顧客として見込めるためです。

また、海外での営業支援体制も強化していきます。重要顧客への訪問に日本の研究者が同行し学術営業を展開したり、顧客先での研究者向けセミナーを積極的に開催するなど、欧米市場での営業サポート力を高めていきます。当社商品の優位性を証明するデータづくりや、各地からの問い合わせに適切に答える窓口の

創薬支援事業における地域別売上高



研究パイプライン

キナーゼ(対象疾患)	HTS	リード創製	リード最適化	前臨床	研究パートナー
SYK(リウマチ)	進捗中	進捗中	進捗中	進捗中	クリスタルゲノミクス社
DYRK1A(神経変性疾患)	進捗中	進捗中	進捗中	進捗中	株式会社キノファーマ 独立行政法人 医薬基盤研究所 国立がんセンター
TNIK(ガン)	進捗中	進捗中	進捗中	進捗中	SBIバイオテック 株式会社
CDC7/ASK(ガン)	進捗中	進捗中	進捗中	進捗中	株式会社 科研製薬株式会社
キナーゼD(免疫炎症疾患)	進捗中	進捗中	進捗中	進捗中	進捗未公表

設置など、後方からのサポート体制の充実も図っています。さらに、中国での代理店営業への同行サポートや、インドでの代理店新設など、重要市場となりつつあるアジアでの営業体制も強化してまいります。

製品についても、引き続きラインアップの拡充を進め、「ピオチン化キナーゼ」「脂質キナーゼ」など、市場ニーズに応じて製品バリエーションを拡充するとともに、重要顧客に対してはカスタムメイドの要望にも積極的に応えていく方針です。

※ ケミカルバイオロジー(化学生物学)…従来主流であった、生命現象を生体内分子の現象で説明する「生化学」・「分子生物学」ではなく、逆に生体内分子の化学(ケミストリー)から生命現象の解明にアプローチする新しい学問領域のこと。

Q 当期の創薬事業の取り組みと今後の展開は?

A 顧客への「導出」(ライセンスアウト)を実現し、創薬事業の柱を構築します。

当期の創薬事業の売上高は27百万円(同77.9%減)、期初計画の23.3%という結果でした。創薬事業で進めている5つの研究パイプラインのうち4つ(1つは進捗未公表)が「リード化合物の最適化」の段階にあり、次のステージ「前臨床試験」へ向けた研究もほぼ計画通りに進捗しております。ただ、当期に予定していた顧客

への導出(ライセンスアウト)が当期中に行えず、これが計画を大幅に下回る要因となりました。

当社では当期、創薬事業の研究開発方針を、ガンを重点領域とすることに変更し、ガンに関する研究テーマをいち早くステージアップさせるため、薬理評価機能を強化しました。この新方針のもと次期の創薬事業では、1つのパイプラインで、化合物を「前臨床試験」段階にすすめるか、もしくは顧客への導出または共同研究の実現によりステージアップする予定です。この導出にあたっては、顧客にとっての契約のしやすさを考慮して、初回の「契約一時金」を低めに設定することも想定されるため、次期業績ではそれほど大きく見積もっていませんが、導出後も顧客の研究開発の進捗に応じた「マイルストーン収入」や、新薬発売後の「ロイヤリティ収入」が何年間も見込める、本格的な契約の締結を目指します。これにより将来にわたる確かな収益源、事業の柱がつかれると考えています。

創薬事業では「実績」の有無が非常に大きく作用します。当社にはこれまで外部への導出という見えやすい実績がなく、当社への評価をより高めるためにハンディキャップとなっていました。ひとたび大手製薬企業への導出が決まれば業界での信頼度が大きく高まり、以後は格段に導出ビジネスが進めやすくなります。必ず次期中にこれをやりとげ、創薬事業の開花期につなげていきます。

セグメント別売上高・営業利益計画及び目標 (百万円)

	2010年度	2011年度(計画)	2012年度(目標)	2013年度(目標)	
売上高	創薬支援事業	543	650	750	900
	創薬事業	27	120	400	700
営業利益	創薬支援事業	59	138	232	346
	創薬事業	△457	△392	△222	△28

Q 次期(2011年12月期)の展望は?

A 市場回復を踏まえ、再び成長路線へと復帰させます。

次期は、国内外の製薬業界再編の影響も一段落し、各社の研究開発投資は回復してくると見えています。米国の医薬品市況も回復基調に入っており、各製薬企業でも研究テーマの取捨選択が一段落した模様で、昨年末から問い合わせ件数も回復してきました。停止していた各社の研究が再開されることで、当社の海外売上も回復が見込めます。

こうした状況を踏まえ、次期の業績は、創薬支援事業で650百万円、創薬事業で120百万円、合計で連結売上770百万円を見込んでいます。地域別では国内が345百万円、海外が305百万円(地域別内訳は米国が195百万円、欧州97百万円、アジアを含むその他が13百万円)を見込んでいます。当期は海外の売上比率が低下しましたが、今後の大きな成長のためにも、次期以降は再び海外事業の比重を高めるよう注力していきます。また、次期の損益に関しては、当期純損失221百万円(前年は397百万円の損失)と、赤字幅を大幅に縮小する予定です。

今後のステージアップ数及び研究テーマ数の計画及び目標 (件)

	医薬品開発		
	基礎研究 創薬研究	前臨床試験	臨床試験
	創薬研究 約5年	前臨床試験 1~3年	臨床試験 3~7年
2010年度	5	0	0
2011年度(計画)	5	1	0
2012年度(目標)	5	2	1
2013年度(目標)	5	2	1

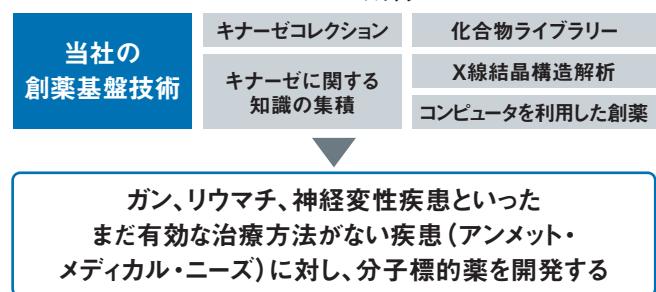
Q 中長期の経営方針は?

A 2年後に黒字化し、「革新的バイオベンチャー」のビジネスモデルを確立します。

中長期の経営方針として、2011年2月に「中期事業計画(対象年度2011-2013年)」を発表しました。同計画では2012年12月期に、創薬支援事業は売上高750百万円、創薬事業では新規の導出と既に導出した研究の「マイルストーン収入」を合わせ、売上高400百万円を目標に掲げています。また、損益については当期純利益23百万円と、2012年12月期に待望の黒字化を実現する予定です。さらに計画最終年度の2013年12月期には、創薬支援事業で売上900百万円、創薬事業で700百万円、当期純利益331百万円と、黒字幅を大きく伸ばしていく考えです。

ガン、リウマチ、神経変性疾患などのアンメット・メディカル・ニーズに対するキナーゼ分子標的薬への期待は、ますます高まっており、長期的にはこの市場が世界規模で拡大していくことは間違いありません。昨年の株主通信でも述べましたが、創薬バイオベンチャーは、創業後しばらくは先行投資として研究開発費がかさむビジネスです。米国で大成功した巨大バイオベンチャーは、いずれも創業後10年以上も赤字を出し続けました。しかし、多くの株主の理解に支えられて

アンメット・メディカル・ニーズへの期待



研究を継続し、最終的には画期的な新薬を生み出すことができました。

当社の場合は、自社研究と並行して製薬企業の研究を支援する創薬支援事業を展開し、これにより研究開発費の一部を賄っております。さらに創薬研究においても、多額のコストが必要となるフェーズIIb以降の臨床試験は行わず、その前段階で導出することで「ローリスクかつハイリターン」のビジネスを志向しています。当社の経営は、創薬支援事業の売上があと一歩伸びれば、その下支えにより、赤字の心配なく創薬研究を行えるところまできております。

そのような世界でも例のない、革新的なバイオベンチャービジネスのモデルに近い将来、構築できると確信しています。株主の皆様にはぜひこのことをご理解いただき、引き続き当社への温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2011年3月
吉野 公一郎

各事業の経営戦略

1. 創薬支援事業
 - ・欧米での売上拡大
 - ・顧客ニーズに応じた製品・サービスの提供
 - ・顧客からの問い合わせに対する充実した情報提供
2. 創薬事業
 - ・ガンを重点領域として研究を進める
 - ・導出のための事業開発機能の強化
 - ・人員増強による薬理機能、前臨床試験の管理強化

創薬研究部長が語る「カルナバイオサイエンスの研究開発力」 迅速な「決断」と、スタッフ達の「情熱」が当社の最大の強みです。

1 思い通りの研究に打ち込める環境

創薬研究部のスタッフは現在12名。5つの研究パイプラインを進めるには人数が少ないと思われるかもしれませんが、創薬の研究は研究者の数では決まりません。当社の研究スタッフは国内・海外の大手製薬企業で経験を積んだ精鋭で、研究のブレーンとなって海外のCRO^{※1}と協力しながら研究を進めています。数千人の研究員を抱える大手製薬企業が近年発売した新薬の多くは、自社創薬部門の成果ではなく当社のような小規模バイオベンチャーの研究成果を途中から買い取ったもので、今や世界の創薬はバイオベンチャーの開発力に頼るところが大きいのです。

バイオベンチャーから成果が出やすい要因の一つとしては、少数精鋭による機動力が大きいと考えています。大手の場合、可能性を秘めたテーマや化合物を発見しても、科学的判断とは別に、組織としての判断に長い時間がかかり、リスクを恐れて研究成果が日の目を見ないケースもよくあります。その点、当社は決断プロセスが非常にシンプル。大手なら半年以上かかることもある事案が半日で決められ

ます。また、各テーマに設定した明確な研究タイムラインとマイルストーンで、研究員は自ら早期に解決すべき課題を洗い出し、全力でその研究に取り組んでいます。思い通りの研究に打ち込める環境がスタッフの情熱を生み出し、明確な目標が高いモチベーションを保っているのです。

創薬研究部長 農学博士
澤 匡明

2 体制を整備し研究をさらに加速

ある化合物を薬として世に送り出すには、その化合物の薬理的評価が非常に重要です。さらに「ピカ新」と呼ばれる新しい作用機序の薬では、偶然観察されるような些細な作用も見逃さない洞察力 (serendipity) が重要になります。昨年、当社では、このserendipityな発見を成果にできるように、外部委託していた「薬理評価」^{※2}を自社で行えるように薬理評価部門を構築しました。しかしながら限られたリソースを最大限に活用するためには選択と集中が重要です。そこで「ガン」を最重点疾患領域と設定し、薬理評価機能を「ガンに関わる研究」に集中させて整備しました。これは、現在のアンメット・メディカルニーズの中で、最も解決が求められているものがガンであり、その克服に向けて最も高い可能性を持つものがキナーゼ阻害薬だからです。まだ、現在は細胞評価機能ですが、今後、担癌マウスなどの高次評価も自社内で実施できるようにしていきたいと考えています。

※1 CRO: 医薬品開発業務受託機関 (contract research organization)。

※2 合成した化合物を細胞や動物などの生体を用いて、その薬効を検証するプロセス。



1 国立がんセンターとの共同研究が、医薬基盤研究所の「基礎研究推進事業」に採択されました。

2010年4月、当社と国立がんセンターが共同で進める「Wntシグナルを遮断する大腸ガンの新規治療薬の研究」が、独立行政法人・医薬基盤研究所(基盤研)の運営する「保険医療分野における基礎研究推進事業」に採択されました。この採択によって今後、

最長5年間にわたり年間1億円が助成され、積極的な研究投資が可能になることで、共同研究の更なる進展が期待できます。なお、これに伴って昨年度開始した科学技術振興機構の「A-STEP」に関わる委託研究開発契約は2010年3月で終了いたしました。

2 創薬研究部を発足しました。

当社の創薬研究では、現在5つの研究テーマで研究を進めております。細胞、動物試験などの高次評価系を5つの研究テーマで共通化し、効率的な創薬研究を行うため、2010年4月に創薬研究部を発足しました。創薬研究部では、既に多種にわたるガン細胞評価系などの高次評価系の構築を行っており、当社の研究開発体制に薬理評価機能を新たに加えたことで創薬研究の更なる加速を目指します。

3 TCGライフサイエンス社と業務提携しました。

2010年10月、当社は創薬・臨床開発の受託サービス事業をグローバルに展開する「TCGライフサイエンス社」(本社インド)と戦略的業務提携を結びました。今後は同社の総合的な創薬研究開発サービスと当社の創薬基盤技術を合わせた高付加価値サービスを世界の製薬企業やバイオテクノロジー企業に提供していきます。

●TCGライフサイエンス社の概要

商号: TCG Lifesciences Ltd.

所在地: Block BN, Sector V, Salt Lake City, Kolkata, India

事業内容: 創薬及び臨床開発の受託サービス

4 ビオチン化キナーゼタンパク質の販売を開始しました。

当社は数々のキナーゼタンパク質製造で培ったノウハウを基に「ビオチン化キナーゼタンパク質」の開発に成功し、2010年10月から販売を開始しました。ビオチン化キナーゼタンパク質はキナーゼタンパク質をビオチンという低分子で標識したもので、表面プラズモン共鳴 (SPR) やバイオレイヤー干渉法 (BLI) といった原理を利用した物質間の相互作用を評価する解析機器で利用できるようになり、当社販売のキナーゼの用途が広がりました。

5 米国ACD社とプロファイリング・サービス受託の代理店業務を開始しました。

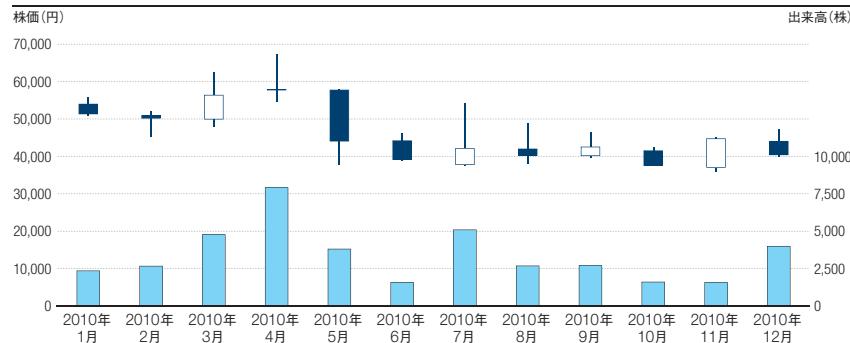
2010年11月、当社は米国Advanced Cellular Dynamics (ACD)社開発の細胞を用いたチロシンキナーゼアッセイパネルによるサービス受託の代理店業務を開始しました。このアッセイパネルは、市場最大のチロシンキナーゼ52種のアッセイが可能で、細胞を用いた高次評価系であることから、従来の分子レベルでの評価系に比べ、より臨床に有用な化合物の選択に貢献することが期待されます。

連結貸借対照表

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 2009年12月31日現在	当連結会計年度 2010年12月31日現在
(資産の部)		
流動資産	1,760,363	1,456,453
固定資産	283,546	199,743
有形固定資産	115,193	66,775
無形固定資産	26,957	20,253
投資その他の資産	141,395	112,713
資産合計	2,043,910	1,656,196
(負債の部)		
流動負債	168,818	161,661
固定負債	73,827	129,068
負債合計	242,645	290,729
(純資産の部)		
株主資本	1,800,465	1,403,357
資本金	2,125,632	2,125,632
資本剰余金	673,100	673,100
利益剰余金	△998,266	△1,395,374
評価・換算差額等	798	△37,890
純資産合計	1,801,264	1,365,466
負債純資産合計	2,043,910	1,656,196

株価と出来高の推移



連結損益計算書

(単位:千円)

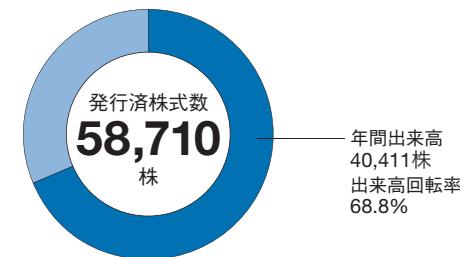
科目	前連結会計年度 2009年1月1日から 2009年12月31日まで	当連結会計年度 2010年1月1日から 2010年12月31日まで
売上高	687,013	571,800
売上総利益	471,244	369,967
営業損失(△)	△344,278	△398,185
経常損失(△)	△349,791	△370,026
税金等調整前当期純損失(△)	△313,053	△394,763
当期純損失(△)	△315,397	△397,107

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 2009年1月1日から 2009年12月31日まで	当連結会計年度 2010年1月1日から 2010年12月31日まで
営業活動によるキャッシュ・フロー	△419,603	△309,950
投資活動によるキャッシュ・フロー	83,864	△45,254
財務活動によるキャッシュ・フロー	392,824	38,858
現金及び現金同等物に係る換算差額	1,498	△1,193
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	58,583	△317,539
現金及び現金同等物の期首残高	1,432,132	1,490,716
現金及び現金同等物の期末残高	1,490,716	1,173,176

出来高回転率 (2010年1月~2010年12月)



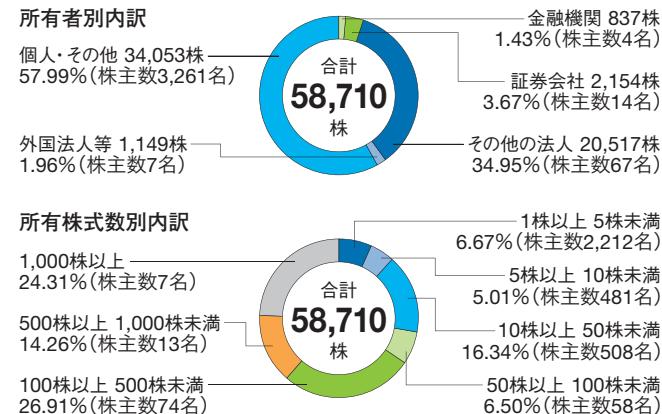
株主の状況

発行可能株式総数	300,000株
発行済株式の総数	58,710株
株主数	3,353名

大株主

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
ジャフコ・バイオテクノロジー 1号投資事業有限責任組合	3,138	5.3
CSK-VC ライフサイエンス 投資事業有限責任組合	2,853	4.9
バイオ・サイト・インキュベーション 1号投資事業有限責任組合	2,739	4.7
吉野 公一郎	2,000	3.4
ジャフコ V2 共有投資事業有限責任組合	1,540	2.6
クリスタル ゲノミクス インク	1,000	1.7
バイオ・サイト・インキュベーション 2号投資事業有限責任組合	1,000	1.7
東山 繁樹	980	1.7
シーエスケイブイシー 3号投資事業有限責任組合	881	1.5
津木 憲紘	800	1.4

株式・株主分布



株主メモ

事業年度	毎年1月1日から12月31日まで
定時株主総会	毎年3月開催
基準日	毎年12月31日
上場証券取引所	大阪証券取引所 JASDAQ市場(グロース)
証券コード	4572
株式の売買単位	1株
公告方法	電子公告により、当社ホームページに掲載いたします。 http://www.carnabio.com/japanese/ir/notification.html ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告を行うことができない場合は、日本経済新聞に掲載します。
株主名簿管理人および 特別口座の口座管理機関	大阪市中央区北浜四丁目5番33号 住友信託銀行株式会社
株主名簿管理人 事務取扱場所	東京都中央区八重洲二丁目3番1号 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(郵便物送付先)	〒183-8701 東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(電話照会先)	☎ 0120-176-417
(インターネット/ ホームページURL)	http://www.sumitomotrust.co.jp/STA/retail/service/daiko/index.html

■ 特別口座について

株券電子化前に「ほふり」(株式会社証券保管振替機構)を利用されていなかった株主様には、株主名簿管理人である上記の住友信託銀行株式会社に口座(特別口座といいます。)を開設いたしました。特別口座についてのご照会および住所変更等のお届出は、上記の電話照会先をお願いいたします。

会社概要

商号	カルナバイオサイエンス株式会社
設立	2003年4月10日
資本金	21億2,563万円 (2010年12月31日現在)
事業内容	創薬支援事業：キナーゼタンパク質、アッセイ開発、 プロファイリング・スクリーニングサービス 等の製造・販売 創薬事業：キナーゼ阻害薬の研究・開発
従業員数	46名 (2010年12月31日現在)
所在地	神戸市中央区港島南町一丁目5番5号 BMA 3F
上場市場	大阪証券取引所JASDAQ市場(グロース) (証券コード4572)

海外子会社

商号	CarnaBio USA, Inc.
代表者	吉野 公一郎 (当社代表取締役社長)
所在地	米国マサチューセッツ州、ネイティック (ボストン市近郊)
主な業務内容	北米における創薬支援事業
資本金	400千米ドル
従業員数	2名 (2010年12月31日現在)

役員 (2011年3月23日現在)

代表取締役社長	吉野 公一郎
取締役	相川 法男
取締役	桑原 慎一
取締役(社外)	柳原 恒久
常勤監査役(社外)	有田 篤雄
監査役(社外)	小笠原 嗣朗
監査役(社外)	中井 清



本社 (BMA 3F)

カルナバイオサイエンス株式会社

〒650-0047

神戸市中央区港島南町1丁目5番5号 BMA 3F

TEL 078-302-7039(代表) FAX 078-302-6665(代表)

URL <http://www.carnabio.com>

カルナ<CARNA>の由来

当社の社名である「カルナ(Carna)」はローマ神話の「人間の健康を守る女神」です。また「身体の諸器官を働かせる女神」などとも言われています。当社は生命科学「バイオサイエンス(Bioscience)」を探究することで「人々の生命を守り、健康に貢献することを目指す」ことを基本理念としています。当社はまさに「カルナ(Carna)」でありたいと願っています。



ホームページで最新IRニュースを発信しています

トップページ



IR情報ページ



「IR情報」ではIRニュースを掲載しています。また、「IRお問い合わせ」のページでご意見・ご質問などをお受けしております。

IRニュースメール新規会員登録
ただいま会員募集中

最新のIRニュース、IR情報をメールでお知らせするサービスです。ぜひ、ご登録ください。

見通しに関する注意事項

当報告書の記載内容のうち、歴史的事実でないものは将来に関する見通し及び計画に基づいた将来予測です。

これらの将来予測には、リスクや不確定な要素などの要因が含まれており、実際の成果や業績などは記載の見通しとは異なる場合がございます。

